

県外派遣審判員報告書

作成日 H30年12月17日

大会名	第70回全日本大学バスケットボール選手権記念大会	会場	駒沢オリンピック公園総合運動場屋内球技場
期間	H30. 12. 11 (火)～12 (水)	報告者	隈元 ゆみこ
スケジュール			
期日	内容		場所
12月11日 (火)	16:40～	1回戦 順天堂大学 対 大阪体育大学	駒沢オリンピック公園総合運動場屋内球技場
12月12日 (水)	11:40～	2回戦 愛知学泉大学 対 山梨学院大学	
実技	割り当て	1回戦 順天堂大学 対 大阪体育大学	CC U1・U2 相手 山住 (広島A)、近藤 (北海道A)
<p>○ゲーム前 (プレカンファレンス)</p> <p>ローテーションについて、クローズダウンポジションでいったん吟味してから、スイッチサイドするかしないかの判断をすること、OOBの協力、タイマー管理、交代等の手続きを丁寧に行うこと等基本的なことについて3人で確認した。両チームの情報が薄かったため、ゲームの早い段階で特徴をつかむこと、それぞれのプライマリでの判定をしっかりと行っていくこと、チームファウル数の確認、ベンチへの対応、アイコンタクトをとってゲームを進めていくことなどについて話をした。</p> <p>○ゲームの実際</p> <p>ゲームは、最後までどちらが勝ってもおかしくないシーズンゲームであったが、そんな緊迫したゲームの中、3人でアイコンタクト含め、コミュニケーションがしっかりとれていたため、いくつか不具合がでた場面はあったものの、協力してゲームを進めることができた。判定についても、それぞれのプライマリの中で、個々がしっかりと決断し判定することができていた。何かあれば、セカンダリーとしての判定をするといったクルーでの協力も比較的うまくいった。初めてのクルーだったにも関わらず、3人それぞれがお互いを信頼し、リスペクトし、協力しあえる雰囲気があったからこそ、それぞれがメンタル的にも安定し、落ち着いて判定につなげることができたからだと感じた。</p> <p>○ゲーム後 (ポストカンファレンス) 主任 阿部 哲也 氏</p> <p>クルーとして、CCを中心にしっかりとコミュニケーションがとれており、メカニクスについてもほぼスムーズにいった。そのこともあって、ゲーム自体はどちらに転ぶかわからない状況の中、それぞれが積極的な判定、自信をもった判定ができたということにつながった。それは、クルーが安定していたからこそできたゲームで、良い経験となったゲームだったのではないかと感じた。その中で、TからCサイドのショットプレイで判定しにいったケースでは、手の出方がどうだったか、どちらに責任があったかも含めて、しっかりと見極める必要があった。また、ダブルチームプレーに対する見方、Tの位置取りについて工夫が必要であるということアドバイスをいただいた。</p>			
実技	割り当て	2回戦 愛知学泉大学 対 山梨学院大学	CC U1・U2 相手 向井 (東京A)、本間 (東京A)
<p>○ゲーム前 (プレカンファレンス)</p> <p>両チームについて、お互いが持っている情報を出し合った。(キーマンやチームの特徴など)メカニクスについては、ローテーションを積極的に行うこと(クローズダウンとセットアップの使い分け)、OOBの協力について、チームファウル数の確認、クロックの管理(コントロール、ノーコントロールを含めたTOとのコミュニケーション)など、基本的なことについて3人で確認をした。</p> <p>○ゲームの実際</p> <p>愛知学泉の力が上回ったゲームであったため、とくに後半はセカンド、サードメンバーが出てきたときのローテーションに迷いがうまれ(プレイがはっきりしないこともあって)、Cが一人でプレイを捉えなければならない場面がでてきてしまった。また、本来は誰が1番手として判定すべきなのか?というところで、少しクルーがちぐはぐしてしまったように感じた。それぞれがどのプレイを捉えているのかということをもっと明確にして、判定につなげるべきであった。力の差、体格の差等を加味しても、身体の寄せ方や手の使い方など、もう少し示すべきものがあった。</p> <p>○ゲーム後 (ポストカンファレンス) 主任 星河 良一 氏</p> <p>どうなったら、どういうことがおこったら、どういう状態のときに、Lでスイッチサイドするのかということ準備しておくこと。スイッチサイドしたことに全く気づいていなかったのは何故なのかということも分析して、次につなげること。</p> <p>センタープレイヤーに対する守り方で整理すべきものがあつたのではないかと感じた。また、コーチの声かけやアピール、選手の反応等から日頃コーチがどのようなことを選手に教えているのかということも感じ取った上で、イリーガルなものに対する判定を。</p>			
全体を通しての感想			
<p>今回割り当てをいただいた2ゲームをとおして、積極的にストロングサイドをつくること、クルーでのアイコンタクト、コミュニケーションをとっていくことで、そのクルーでのメカニクスが安定し、それが、個々のメンタル部分の安定や積極的な判定、セカンダリーとしての決断力をもった判定につながることを体感できたように思います。決断に迷うケースにおいては、アングルがとれていなかったり、ローテーションを躊躇してしまったりということがほとんどで、そのためにプレイを長くしっかりとらえられていないことが原因となっていたように思います。それぞれのポジションで何をみるのかということをもっとはっきりすべきこと、その中で、アングルのとり方や立つ位置、クロスステップの活用などもっともっと工夫が必要だと感じました。日頃なかなかレベルの高いゲームに触れる機会が少ない分、映像をみたり、置き換えて考えてみたりと、地元での取り組みの中で工夫していくことも必要だと感じました。あとは機会を見つけて、外にでていくこと。やはり、経験は大きな財産であると感じました。ここでの経験や情報を県内審判員へ伝えていくことも、上級審判員として、また、派遣審判員としての役割です。鹿児島IH、鹿児島国体へ向けても、共に研鑽を積み重ねていきたいと思っています。</p> <p>最後に、大変お世話になりました、全日本大学バスケットボール連盟の皆様、そして、今回の派遣にご配慮いただきました原田審判委員長をはじめ鹿児島県審判委員会の皆様にお礼を申し上げます。ありがとうございました。</p>			